

主 題：福音はわが誇り

聖書箇所：ローマ人への手紙 1章16－17節

パウロは何があっても私はすべての人々に福音を宣べ伝えなければならないと言いました。どこに行っても、それがだれであっても、このすばらしい福音を私はぜひ伝えたいと。今日、私たちが学ぼうとしている16節のみことばでパウロはこのように言っています。「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と、このみことばを見て行くと、最初に否定語が出て来ます。否、「～ではない」と、パウロはこのようなことを言わなければいけないから言ったのではなく、これが彼自身の心の確信でした。彼はこの福音を誇りとしていました。福音のすばらしさを知っていたのです。私はどうしてもこのメッセージを人々に伝えなければいけない、そのことをどうしてもしなければならぬと思っていたのです。このような思いを抱いていたのはパウロだけではありませんでした。イエス・キリストを信じた多くの信仰の勇者たちが同じような思いをもって歩んでいました。ペテロたちが奇蹟を行なったとき、ユダヤ人の中のサドカイ派といわれるグループの人たちは、ねたみに燃えて使徒たちを留置場に捕らえました。ところが、これは神のすばらしいみわざですが、主の使いが夜、彼らのところに現われて、牢の扉を開いて彼らを連れ出しました。そして、このようなことを言います。「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばを、ことごとく語りなさい。」(使徒5：20)と。それで、捕らえられた人たちはまた出て行って「夜明けごろ宮にはいって教え始めた」のです。彼らを留置場に入れた人たちがそこに行ってみるとだれもいませんでした。いったい何が起こったのだらうかと思っているとき、5：25－32「そこへ、ある人がやって来て、「大変です。あなたがたが牢に入れた人たちが、宮の中に立って、人々を教えています。」と告げた。：26 そこで、宮の守衛長は役人たちといっしょに出て行き、使徒たちを連れて来た。しかし、手荒なことはしなかった。人々に石で打ち殺されるのを恐れたからである。：27 彼らが使徒たちを連れて来て議会の中に立たせると、大祭司は使徒たちを問いただして、：28 言った。「あの名によって教えるはならないときびしく命じておいたのに、何ということだ。エルサレム中にあなたがたの教えを広めてしまい、そのうえ、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしているではないか。」：29 ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。「人に従うより、神に従うべきです。：30 私たちの先祖の神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。：31 そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。：32 私たちはそのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です。」、彼らは死を恐れることもなく大胆にこのキリストの福音を、いのちのみことばを語り続けたのです。このような強い決心、福音宣教への熱意、救われていない人たちへの愛はいったいどこからやって来たのでしょうか？その答えを今日見ようとしているこのローマ人への手紙1：16が私たちに教えてくれるのです。信仰の勇者たちがこのようにしてキリストの福音を伝え続けた、いのちがけでメッセージを語り続けた、なぜ、彼らはそのようなことをしたのでしょうか？その答えが16節に記されています。ごいっしょに見て行きましょう。

☆福音を恥としない、その理由？

☆このメッセージは信じる者に救いをもたらすから

これがパウロが教えようとしていること、これが彼の、信仰者たちの理由だったのです。なぜなら、このメッセージによってのみ、信じるすべての人の罪が赦されて救われるから、だから、語らなければならなかったのです。福音が真実であるその理由を彼は三つ上げてそのことを説明して行きます。

1. 福音のメッセージは神のメッセージだから

だから、信じる者に救いをもたらすことができるのだと言います。人間のメッセージはそのようなことができるのでしょうか？慰めをもたらしたとしても罪の赦しをもたらすことはできません。これは神からのメッセージだからです。ですから、「私は福音を恥とは思いません。」と「福音」ということばを使ったのです。この意味は「喜ばしい知らせ」です。人を救いの中に導き入れる知らせです。この福音によって人は救われるのです。私たちがこの「救い」を考えると、どうしても次のことを覚えておかなければいけません。「救い」はある状態から救い出すだけではないのです。新しい状態に入れてくれるのです。古い状態から救い出して新しい状態へ入れてくださる、人を罪にある状態から救い出して新しいいのちへと導き入れてくださるのです。

◎救い、すなわち、新しい状態に入れられるとは？

a) 義なる者とされる＝神は私たちが罪から救い出して義なる者とされます。どういうことでしょうか？私たちが神の前に有罪判決を受けた者たちです。罪があると宣言された者たちです。私たちが周りの人

たちと比較して、自分はそれほど罪を犯していないというかもしれません。しかし、審判者は私たちの周りの人間ではありません。私たちをさばくお方は私たちのすべてをご存じである神です。その方が審判者です。そして、その方が私たちに言われることは、あなたには罪がある、あなたは有罪だということです。そのように罪がある私たちを神は有罪であるその罪から私たちを救い出してその罪を赦してくださいました。コロサイ 1 : 14 に「この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」とあります。ローマ 5 : 1 には「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」とあり、今、私たちは神との平和をもっていると言います。ということは、それ以前は、神との平和を持っていなかったということです。ですから、生まれながらの私たちは神の前に罪ある者と宣言され、罪ある者として生きてきた、そのような私たちを神は一方的な恵みによって救い出してくださった、罪のない者として…。このことは私たちは次回 17 節で学びます。神は私たちを義なる者としてくださった、聖い者としてくださった、正しい者としてくださった、だから、今私たちは聖い神の前に立つことが赦されているのです。

b) 罪の汚れから救い出して私たちに聖い者とされる＝生まれながらの私たちは神の前に汚れた者で、私たちのうちには何の良いところも見出すことはなかったのです。そのことをイザヤはこのように言います。イザヤ 64 : 6 「私たちはみな、汚れた者ようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちに吹き上げます。」と。このような者であった私たちを神は救い出してくださった。ですから、ローマ 7 : 21 - 25 でパウロはこのように教えています。「そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。:22 すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいのに、:23 私のからだの中には異なった律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。:25 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」と、パウロの心の葛藤を述べています。罪との葛藤があつたのです。そして、私たちが断言できるのは、間違いなくパウロは救われていた、なぜなら、パウロの心の中には善をしたいという願いがあつたからです。神を喜ばせたいという願いがあつたのです。このような願いは生まれながらの人間にはないのです。救われていない人間にはないのです。救われた私たちに神が与えてくださる思いです。ローマ 6 : 1 - 2 でも「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。:2 絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。」と、力強いみことばです。もう私たちは罪に対して死んだのだ、その私たちがどうしてなおも罪の中を歩み続けて行くことができるでしょう！と。確かに、私たちの日々の生活を振り返るとき、罪との戦いがあります、罪の誘惑があります、罪の力に敗北することがあります。でも、神によって救われて生まれ変わった者は、その中にあつて、これは間違っている、神の前に悔い改めよう、神の前に喜ばれることをして行こうと、そのような新しい思いをいただいています。パウロはそのことを教えているのです。救いは私たちにその罪の汚れから救い出してくださって、私たちに聖い者としてくださった、聖い神の前に受け入れられる、聖い神の前に立つことが赦される、そのような者に変えられた、これが救いなのです。

c) 罪の奴隷から解放されて自由が与えられた＝生まれながらの人間は罪の奴隷であつたと言います。ローマ 6 : 17 - 18 に記されています。「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、:18 罪から解放されて、義の奴隷となつたのです。」、どちらにしても私たちは奴隷です。人間はどちらかに属するのです。罪の奴隷か義の奴隷か、サタンの奴隷か神の奴隷かです。生まれながらの人間は例外なくみな罪の奴隷でありサタンの奴隷です。ですから、罪を止めることができない、主人であるサタンを喜ばせることしかできない、罪に罪を重ねることしかできないのです。でも、感謝なことに、神は私たちにそのような罪の奴隷から解放してくださって、自由を与えてくださったのです。ガラテヤ 5 : 1 でパウロはこのように教えてくれます。「キリストは、自由を得させるために、私たちに解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」と、私たちは自由を得た、罪の奴隷から解放された、もう罪は私たちの主人でなくなつたのです。私たちは義の奴隷となつた、神の奴隷となつた、神に従う者になつた、だから、私たちのうちには神を喜ばせたいという思いがあり、そのように歩んで行きたいという思いを神がくださっているのです。ですから、「救い」というのはこのように罪の奴隷から解放して、私たちに自由な者としてくださったということです。

d) 罪のさばきから解放されて神の祝福をいただく者に変えられた＝私たちは永遠の死から解放されて、永遠のいのちをいただく者になりました。パウロはこのように言います。エペソ 2 : 1 「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であつて、」、5 節では「罪過の中に死んでいたこの私たちを」と、私たち

は罪の中にいたのです。その私たちに約束されていたことは永遠のさばき、永遠の滅び、永遠の地獄です。しかし、神はそこから私たちを救い出してくださった。救い出して、私たちがこの神と歩むこと、ともに永遠を過ごせる者へと変えてくださった。のろわれてしかるべき者である私たちを、神の祝福を楽しむ者へと変えてくださったのです。罪のさばきから解放して神は祝福をくださった、その祝福は永遠のいのちだけではありません。神の愛をいただいています。神の怒りを受けるべき私たちが、そこから救われて神の愛をいただいたのです。同じエペソ 2 : 3 には「**私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。**」、神の怒りを受けて当然だった、そのような者であったにもかかわらず、神は私たちをあわれんでくださって、私たちにすばらしい愛を与えてくださったのです。4 - 6 節「**しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、**」——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——:6 **キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。**」。ローマ 5 : 5 には「**この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。**」とあります。神は何をしてくださったのでしょうか？神の怒りを受けてしかるべき私たち罪人、永遠の滅びに至ってしかるべき罪人である私たち、そのような私たちに神は何をしてくださったのか、私たちをその罪から救い出してくださっただけでなく、私たちに神の愛を与えてくださったのです。神を愛する者に、また、その神の愛を実践することができる者に私たちは生まれ変わったのです。

ですから、今見てきたように、「福音」というのは罪の有罪宣告から、罪の汚れから、罪の奴隷から、罪のさばきからあなたを解放することができるものです。そして、義なる者へと、聖なる者へと、自由なる者へと、祝福をいただく者へと変えてくださる、そのようなメッセージなのです。だから、この「福音のメッセージ」というのは喜ばしい知らせと言われるのです。「福音」なのです。罪の中を歩み罪の中に死んでいた私たち、救われる希望のまったくなかった私たちに神はこんなすばらしい光を与えてくださったのです。このような罪人を救うために神はこんなにすばらしい恵みを与えてくださったのです。ところが、多くの人にとってこれは「福音」、良き知らせではないのです。却って、悪い知らせです。なぜなら、「良い知らせ」だと思わないからです。このメッセージを聞いて皆が、これはすばらしいメッセージだ、ここに希望がある、ここに救いがあると思うなら、皆受け入れるはずです。悲しいことに、多くの人々はこの救いのメッセージを聞いても、彼らにとってこれは喜ばしい知らせ、良き知らせではないのです。愚かなことなのです。みことばはそのことを教えています。パウロは I コリント 1 : 18 でこのように言います。「**十字架のことは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちに、神の力です。**」と。福音のメッセージはばかばかしいこと、信じがたいこと、信じるに値しないことだと言います。同じ I コリント 1 : 22 - 24 でパウロはこう言います。「**ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。:23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、**」、これが人々の反応なのです。このメッセージを聞いても聞いても愚かなことにしか思えないのです。24 節にパウロはこのように言います。「**しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。**」。どれほど私たち人間が罪深いかわかります。神に逆らっているだけでない、このような救いのメッセージを聞いてもなお神に逆らい続けているのです。私たちはみな、その罪ゆえに神の怒りを、さばきを受けて当然なのです。神に従う者として、神を愛する者として造られた私たちは、自分の好きなように生きようとしています。自分の人生だから自分の好きなように生きると…。まさに、パウロが言った通りです。「**彼らの目の前には、神に対する恐れがない。**」(3 : 18)。私たちが覚えなければいけないことは、神はこのような今の世の中を見て、このような罪人を見て喜んでおられるのではない、神は怒っておられるということです。ローマ 1 : 18 には「**というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。**」と記されています。パウロがいうことは、神はあなたの罪を知ってあなたに対して怒りをもっているということです。聖書のどこにも神はあなたの罪を見て仕方がないとか、見て見ぬ振りをするなどということはありません。神はすべてを知ってその罪に対して怒りを覚えているのです。この 18 節にある「**神の怒りが天から啓示されている**」という「怒り」ということばは新約聖書の中に 36 回も出て来ます。しかも、ローマ人への手紙には 8 回出て来ます。2 : 5 には「**ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。**」、6 節にも「**神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。**」、16 節には「**私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。**」とあります。

みことばが私たちに警告することは、神はあなたの罪をご存じでその罪に対して怒りをもっている

ということです。どんなに小さな罪でも神は喜ばれない、嫌悪感をもっておられるのです。ジョン・カルバンはこんなことを言いました。「救いということばについて言うなら、聖書全体を通じて、これは滅亡ないし破滅ということばの反対の意味に使われている。かくして、福音は破滅と終わりなき死ののろいから救うのである。ということは、この福音を信じていなければ、その人に待っているのは破滅であり終わりなき死ののろいなのだ。」、それこそ私たちにふさわしいものです。神に逆らい続けて神の前に罪を犯している者たちが受けるべき当然の報いです。そのことをみことばは繰り返して私たちに教えるのです。でも、感謝なことに、神はそのような私たちをあわれんでくださったのです。そのあわれみをいただくために神は「悔い改めなさい」と言われます。使徒17:31「**なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」「日を決めておられる」と、イエス・キリストによってすべての罪が正しくさばかれるのです。だから、「悔い改めなさい」と言うのです。R・C・スプロールという神学者はこんなことを言います。「悔い改めない者が墓の向こう側で最も目にしたくないもの、それは神である。私たちは神から救われなければならない。ところが、救ってくださるのは神ご自身なのである。ここに福音のすばらしさがある。」と。さばれて当然の私たち、そして、そのことを実行すると言われた神、必ずさばくと言われた神、その神がさばかれて当然の私たちに救いの手を差し伸べてくれたのです。それが福音のメッセージなのです。なんという神のあわれみでしょう。神の役に立たないこのような私たちを神はなぜ救ってくださるのでしょうか？あわれみをかけてくださるのでしょうか？イエスを信じた後の私たちの歩みを振り返ったとき、私たちはどれほど神を悲しませていることでしょうか。この1週間を振り返ってもその通り、神を忘れていないでしょうか？神のことよりも自分のことを優先し、自分の思い考えに従って生きて来ていませんか？いったい、なぜこのような者を救われたのでしょうか？このようなあわれみを示してくださるのでしょうか？神は警告されました、罪はさばかれる、だから、この神から私たちは救われる必要があるのです。そして、すばらしいことに、その神ご自身が救い主を送ってくださった、救いの道を示してくださった、そして、その救いの道に私たちを導き入れてくださったのです。**

2. 福音が救いを得る唯一の方法だから

16節を見てください。このすばらしい救いを得る唯一の方法は何か、「**信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。**」と言いました。信じること、信仰です。この信仰によってのみ救われるのです。次回、私たちはそのことを見ます。17節のみことばはこのローマ書の最も中心的なみことばです。これが人々を変えたのです。ルターを変えたのです。そして、宗教改革が起こったのです。「義人は信仰によって生きる」、信仰によって罪の赦しをいただくことができる、それが分かったとき人々は変わったのです。この16節のみことばによってパウロはそのことを私たちに教えてくれます。信仰によって、信じることによって、私たちはこのすばらしい救いへと導かれるのです。この信仰に関して、神学者のH・シーセンはこのように言います。「聖書は信仰を人間の心が行なう行為として描いている。そのように言うこともできよう。」と。頭だけではない、心が行なう行為だと、そして、こう言います。「それは知性、感情、意志における行為を含んでいる。」と。「信じる」というとき、私たちが覚えなければいけないことは、そこには知性と感情と意志が含まれるということです。どういうことか説明します。

私たちが正しい信仰をもつために、この救いの信仰を自分のものとするために必要なことは、

(1) **知性**=真理を知ること、私たちは神がどのような方かを知らなければいけません。そして、自分がどのような者かを知らなければいけません。自分の罪深さを。イエス・キリストと彼が為さった救いのみわざ、十字架と復活を知らなければいけません。神が備えてくださった救いをしっかり知らなければいけません。どうすれば救われるのか、そのことを知らなければいけません。このような真理を知ることが必要なのです。それは神のおことばからです。「**信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。**」(ローマ10:17)とあります。私たちが神の真理を知ろうとするなら、行くべきところは一つ、神のおことばです。これが神の真理であり、これが神のメッセージです。神について知りたければ、自分について知りたければ、私たちは聖書を見ればよいのです。そうすれば、人との比較を止めます。全知の神が私をどのようにご覧になっておられるのか、その目をもって自分を見始めます。イエスが何を為してくださったか、十字架はどんな意味をもっているのか、イエス・キリストの復活はいったい何を意味しているのか、その真理を知ることが必要です。本当の救われる信仰を得るためには真理を知ることが必要なのです。しかし、どんなにたくさんの真理を得たとしても、知っているだけでは救いに至らないことは皆さんご存じです。サタンでも知っています、イエスがキリストであることを知っています。その知識では救いを得ることはないのです。私たちがどんなに情報を得たとしても、その情報を得ることが私たちを救いに導くことはないのです。

(2) **感情**=ですから、二つ目に感情が必要なのです。つまり、神が言われたこと、みことばが真実で

あることの確信、そして、自分の罪、過ちを自覚すること、自分は罪の赦しが必要な罪人であることを確信するのです。ペンテコステのときペテロがメッセージをしました。使徒の働き2章にあります。そこでペテロはそこにいた人々に対して、イエスが神であり約束の救世主であることを話しました。そのことを話したとき、不思議なことが起こっています。2：37「**人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。」と言った。**」と「**心を刺され**」とあります。非常に興味深いことばを使っています。深く悲しんだのです。頭で分かっているだけでは心にそのような思いを抱くことはありません。この人々はペテロの語るメッセージ、真理を聞きました。そのとき、彼らの心の中に神のわざが為されたのです。「**心を刺された**」、それを聞いて彼らは非常な悲しみを覚えたのです。自分の罪が見えたのです、自分の罪深さに気付いて行くのです。ですから、彼らは「**兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。**」、大変な罪を犯してしまった、神の前に私は大きな罪を犯した罪人なのだ、どうしたらいいのか、どうすれば救われるのかと言います。だから、ペテロは答えました、「**悔い改めなさい。**」と。この働きは神の働きです。聖霊なる神がこのような働きを私たちのうちに為すのです。ヨハネ16：8「**その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。**」、13節の初めにも「**しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。**」とあり、聖霊なる神が働いたならその人の心に自分の罪深さを悟らせてくれるのです。そのような働きを神が為すのです。感動的な話を聞いて涙を流すことがあります。けれども、必ずしもそれは聖霊の働きではありません。みことばが教えることは、神の真理を聞いたときにその真理が私たちの心の中に聖霊によって働かれたとき、私たちは「神よ、私は本当にあなたに対して罪を犯した、私は罪人だ、私は救いを必要としている」と、そのことを神が私たちに悟らせてくださるのです。自分の罪を自覚し始めるのです。私は滅びる、私はさばかれる…と。このような働きを神は為すのです。Iコリント2：14でパウロはおもしろいことを言います。「**生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわかまえるものだからです。**」、「**生まれながらの人間**」、つまり、罪人は神のことが分からないと言うのです。だから、真理のメッセージを聞いても理解できないのです。確かに、知識として情報として頭に入って行き残るかも知れません。でも、聖霊なる神がその人の心のうちに働いてくださって、罪を自覚するまでその人は分からないのです。なぜなら、その人は霊的に死んでいるから神のことが分からない、届かないのです。ですから、神がその人のうちに働いて、真理を悟らせてくださる、罪を示してくださる、罪を自覚させてくださる、救いが必要な存在であることを明らかにしてくれるのです。だから、その人はペテロのメッセージを聞いた人々のように、どうすればいいのか、ピリピの看守のように、救われるために何をしなければなりませんかと、罪の状態が分かった人々はどうすればそこから救われるだろうと、そのことを考え始めるのです。

(3) **意志**=だから、意志が必要なのです。このように神が真理を教えてくださり、心に働いてくださるとき、当然、そこに選択が生まれます。意志です。「私はこのイエス・キリストを信じたい。イエスさま、どうぞ私の罪を赦してください。私はもうこれからあなたに逆らう生き方を止めて、あなたを信じてあなたに従って行きたい。私はあなたを私の救い主と信じて従って行きたい。こんな罪深い私のために、神のひとり子イエスさまが身代わりとなって十字架で死んでくださった。そして、三日後によみがえってくださった。この成し遂げられた救いのみわざに感謝します。こんな私をこのようにあわれんでくださって感謝します。」とイエス・キリストを心から受け入れようとするのです。

だから、救いにはこれら三つのものが必要なのです。先ほど話したシーセンはこのように言います。「自分の信仰がこれら三つの要素全部を含んでいないかぎり、本当に救われているとは言えない。」と。それは真理を聞き、理解し、心が主によって砕かれ、いかに自分が罪深く、主のあわれみと慈しみをいただく資格のない者であるかが分かれば、そのような者に備えられた救いを感謝して受け入れる選択をするはずだからです。

本当の信仰、その人にはすばらしい祝福が約束されています。ウィリアム・ヘンドリックソンという神学者はこう言います。「信仰は木の幹である。その根は恵みを現わし、その実は良い働きを現わす」と。つまり、その根がしっかり神の恵みに根付いているなら、そこにはすばらしい実が実って行く、その実がその信仰が本物であることの証なのです。

3. 救いの保証があるから

パウロは「**神の力**」と言います。1：16「**信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。**」と。英語の「ダイナマイト」ということばが原語になっているこのことばが使われています。なぜ、このことばがここで使われているのか、パウロは敢えてこのことばを用いることによって、この力の源を明らかにしたかったのです。「**神の力**」である、人間の力ではない、だから、「**神の力**」が働くとき私たちは理解を越えたことを行なうことができるのです。そのようなことを神は行なって来られました。使徒の

働き 1 : 8 には「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」とあり、同じ使徒の働き 4 : 12、13、31 にはこのように記されています。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」「:13 彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。」「:31 彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。」、この力は彼らにあったものではありません。このようなみわざを為さったのは神ご自身でした。彼らを奮い立たせて、彼らに勇気をもたらしたのは神でした。ですから、信仰者に神は確かに力をくださる、しかし、同時に、この救いのことを考えるときに、人が救われるというのは 100% 神の御力なのです。ルターはこのように言っています。「人を罪から引き上げ彼を義とする力、死からいのちへ、地獄から天国へ、サタンの国から神の御国へと救い出す力、それが神の御力だ。」と。このことをパウロは言うのです。この福音にはその力があると。自分の力では神が受け入れてくださるような完全に聖く正しい者になることなど不可能です。エレミヤ 13 : 23 に「クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行なうことができるだろう。」と教えています。だから、私たちは自分自身の力によって努力によって罪から逃れて、神が救ってくださるような聖い正しい人間になることなど不可能だと言っているのです。マタイの福音書に、ある一人の金持ちがイエスのところにどうすれば天国に行けるのかということ聞きに来ます。すべてのものを売ってわたしに従って来なさいと言ったとき、彼は悲しみながら帰って行った話が出て来ます。そのときにその様子を見ていた弟子たちはこれを聞いて非常に驚いてこのように言います。「:25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」 :26 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」(マタイ 19 : 25 - 26)。

だから、神が救ってくださるのです。神はあなたを罪から救い出す力があるのです。しかも、この救いには何の差別もありません。ユダヤ人であってもギリシャ人であっても、つまり、どんな人であっても、この福音を信じる信仰によってすべての人は救われるのです。すばらしいメッセージです。このメッセージだけです、このように神が用いるのは。このメッセージだけです、神の力が現わされるのは。このメッセージだけです、人が救われるメッセージは。だから、パウロは語ろうとしたのです。語りたかったのです。知らせたかったのです、人々に。あなたはいかがでしょう？このキリストのすばらしい救いのメッセージ、神が与えてくださった、そして、あなたを救ってくださったこのメッセージ、今度は神がこのメッセージをあなたに託してくださったのです。出て行って語りなさいと。この福音のメッセージしか人を救うメッセージは人間に与えられていないのです。このメッセージを語ることです。そして、願わくは、私たちのような愚かな罪深い者を神が使って、この語る福音のメッセージを祝して、人々が救いに与ること、そのことを期待しながら語り続けることです。福音だけが人を救います。